

# 教育観 作中に投影

## 文人の 武蔵野

1983年に芸術選奨文部大臣賞を受賞した三浦朱門の小説「武蔵野インディアン」には、著者自身を思わせる太田久男という作家が登場します。視点人物である太田は、自らは教育の「素人」だと認識していますが、定時制高校の教員経験のあることが記され、その経験に基づく教育観を持っていることが描かれて

### 三浦朱門 ⑤

太田の教育観は、「素質が物を言う」。個人間の学力格差を教育によって変えることは困難である。本人のやる気もあくまで本人次第である。やる気のない勉強嫌いの「落ちこぼれ」に学校や先生がいくら強制しても意味がない、というものです。作中では、かつての教え子「平井」から連絡をもらい、久しぶりに会う場面があります。自他ともに認める「落ちこぼれ」だった平井は立派な本屋の店主になっていまし

ます。太田の教育観は、「素質が物を言う」。個人間の学力格差を教育によって変えることは困難である。本人のやる気もあくまで本人次第である。やる気のない勉強嫌いの「落ちこぼれ」に学校や先生がいくら強制しても意味がない、というものです。作中では、かつての教え子「平井」から連絡をもらい、久しぶりに会う場面があります。自他ともに認める「落ちこぼれ」だった平井は立派な本屋の店主になっていまし



教育課程審議会の会合に出席する三浦（左から2人目）。当時、会長を務めた（1996年撮影）

勉強好きな生徒は大いに勉強してその才を伸ばす。他方、どうしても勉強が嫌いで得意ではない生徒には、勉強を無理強いせず別の個性や才能をみつけて伸ばす。こうした考え方が「ゆとり教育」の根幹にあるのなら、太田の教育観は「ゆとり教育」に繋がります。1996年に文相（当時）の諮問機関「教育課程審議会」の会長に選出される三浦は、「ゆとり教育」の推進者となります。太田は三浦の原点と言えられるかもしれません。公教育の行政を司る文部省（当時）は、77年に「ゆとりある充実した学校生活」を

掲げ、段階的に授業時数を減らし、公教育における学習負担を軽減していく施策をとりました。太田に投影されるような三浦の教育観は、文部官僚の方針との相性もよかったのでしょうか。

太田は平井と再会し、平井が「武蔵野インディアン」であったことを知ります。「ゆとり教育」という賛否両論の教育政策にもまた「武蔵野」の影が差していたのです。（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。